

は、眼窓に關係なく、直に頭蓋の側を巡りて頭の下面に出て、上下顎附近の皮膚に分布す。第六對神經は第五對神經の頸枝に伴はれ（？）、第七對神經ハ、正しく前方に走り、無數の小神經に分枝して頭蓋の前部及側部に於て叢を形成す。其他の脳神經はシロブカに比して大差なし、晚餐後、東方の障子を開けば、月清く朗かに、静けさ雲架の間に懸り、漣立る海面を射て、余等の前面に一條の金鱗を閃めかするさま、得云ふべからず、忽ち聞く、西海岸の方に方つて凄じき怒濤の音の傳達するを、是に於て村上助手と、三人手を連ねて西海岸に趣き、百雷の如き怒濤と月色とを娛しむ、蓋し當地に來りてより、外出散策の矯矢なり。

文苑

光村氏のことどしの勅題に因みてものせしといふ寫眞の富岳九圖をみて、めぐらしくてくつがへる餘にふと読み續けゝる

江の浦の望瀛

敲月樓主人

白妙のふ玄の高峯の雪はれて曙いそくうちの松はら

富士川より望むふ玄

村雲の高嶺ねるしにうち沈む空に浮きたつふし川のふ玄

函根芦湖よりの富峯

はれわたる富士の高根の影たちて芦のあふみに雪を漂ふ

薩埵峠の不二

春くれハ霞ならに不二の根の雪うちよする田子の浦波
雲中の不死

裾野より村たつ雲をふきたてゝ登るや不二のよもの谷風

乙女嶺よりの不盡

駒とめていさみて行かむふ玄の峯に雪の花さく春のあけほの

御殿場驛の芙蓉峯

朝な夕なゆきかふ人の袖の上にうつるやふしの千代の遠かけ

岩淵の富士

青雲の上につもれる白雪の白玉なせる岩ふ玄のふ玄

撮影中の不二

何事も疾き世なりけりふしの嶺のまたゝひまにうつりうつしつ

水邊柳

々
蝶
子

水ろゝみすみたの春のあけほのに寐みたれ髪をけつる青柳

閑居春雨

たれこめてつくづくひとり古へを玄のふの軒に春雨を降る

夜梅

梅の花いつこなるらん尋ねみん香をふき誘ふ風をしるへに

寄松祝

ふた葉より千代もへぬへき色みせてこゝ住よしの岸のひめ松
山路旅

つまきこる道にもえ出るさわらひや賤山かつのなくさなるらん

後撰百人一首評釋

(承前)

禾の舍あるじ

頼子内親王家攝津

ゆく秋のたむけの山のもみら葉は形身はかりや散り残るらん

ゆく秋のたむけしてゆくといふを手向山にいひかけゝるなり手向山は大和の
名所なり山の神にたびゆく人の手向くるはぬさなりすぎゆく秋の、たむくるは、
もみぢなり、たむけは、ゆくをうけ、散りは、もみぢをうけ、殘るは、かたみをうく、これ
一首のくさりなり

藤原忠房

きりくすいたくな鳴きそ秋の夜の永き思ひは我を勝れる

秋をかなしみて、きりくすもなく、我もなく、なくに、かはりはなけれども、思ひに
おどりまさりあり、これをことわるなりはもしぞもし一字千金なり、ながき思ひ
にも、色々あり、故にはもしをたきて、わからしなり、きりくすよりも、我一段まさ